

指導資料

外国語 第96号

 鹿児島県総合教育センター
令和3年10月発行

対象
校種

高等学校
特別支援学校



新学習指導要領に対応した評価の在り方について —「知識・技能」と「思考・判断・表現」の問題—

令和4年度から高等学校でも学習指導要領(平成30年告示)が実施となり、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の三つの観点から評価することとなる。本稿では、評価問題を中心に「知識・技能」と「思考・判断・表現」の評価の在り方について述べる。

1 はじめに

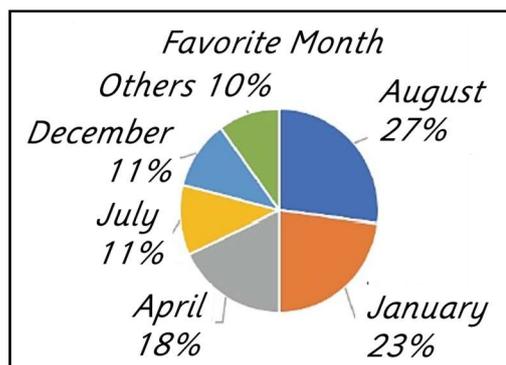
令和3年8月、国立教育政策研究所から『指導と評価の一体化』のための学習評価の参考資料 高等学校 外国語(以下、「参考資料高校版」)が発行された。この資料とともにその中学校版(以下、「参考資料中学校版」)、「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 外国語編」、大学入学共通テスト、欧州共通言語参照枠の日本版 CEFR-J を参考にすると、「知識・技能」及び「思考・判断・表現」の両観点の評価の在り方がみえてくる。本稿では、これらの各資料を参照しつつ、主にペーパーテストにおける「知識・技能」と「思考・判断・表現」の評価について述べる。

2 「知識・技能」の問題か、「思考・判断・表現」の問題か。

問題を作成する際は、その問題が評価する領域と観点を明確にする必要がある。領域は「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと[やり取り]」、「話すこと[発表]」、「書くこと」の五つである。そして「知識・技能」又は「思考・判断・表現」を評価する。学期末や学年末には、内容のまとまり、つまり領域ごとに三観点で評価を行う。「知識・技能」、「思考・判断・

表現」の両観点により定期考査で評価することが多いだろう。そのため、教師は問題作成の際に「どの領域の何を評価する問題か」すぐに判断できると、より効率的に評価を行うことが可能になる。では、下の問題例①ほどの領域のどの観点を評価する問題だろうか。

下の円グラフは、中学生150人を対象に行われた「好きな月調べ」の調査結果です。この円グラフを表す英文として正しいものを選びなさい。



- January is the most popular month.
- July is not so popular as April.
- April is more popular than any other months.
- December is more popular than August.

問題例①

当センターの外国語科の研修の参加者に同じ問いをしたところ、「思考・判断・表現」の問題であるとの答えも多かった。しかし、これは「読むこと」の「知識・技能」を測る問題である。

3 「知識・技能」と「思考・判断・表現」について

文部科学省（平成 31 年度）の「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」では、外国語における「知識・技能」の評価の観点及びその趣旨について、以下のように説明されている（p. 32）。

- ・①外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどについて理解を深めている。
- ・②外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けている。（下線部等は筆者）

下線部①は知識を、下線部②は技能について説明している。つまり、「知識・技能」で評価するのは外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどに関することである。

また「思考力、判断力、表現力等」について、以下のように説明している（p. 32）。

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解したり、これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりしている。（下線部は筆者）

以上から、「思考・判断・表現」は、情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などの理解や表現について評価する。なお「主体的に学習に取り組む態度」は、

以下のように説明されている（p. 11）。

①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとしている側面と、②①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面、という二つの側面を評価する。（下線部は筆者）

「主体的に学習に取り組む態度」については、知識及び技能及び思考力、判断力、表現力等について学ぶ際の粘り強さと学習の自己調整の二つの側面を評価する。

以上のことを基に、領域と評価の3観点について中学校用に整理したものを参考に、高等学校用に整理したものが図1である。

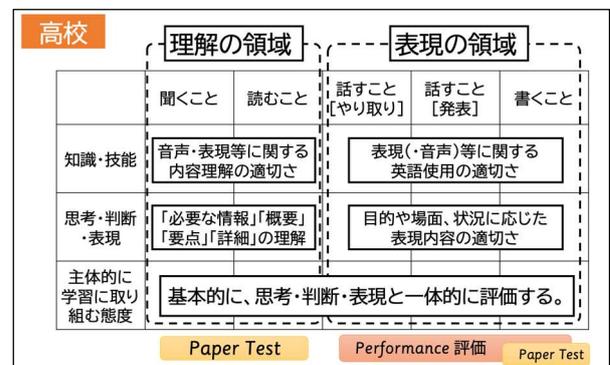


図1 三つの資質・能力の一覧

図1を基に問題例①が「読むこと」の「知識・技能」を測る問題であることを確認する。まずこの問題は、グラフを読み取れるかどうかではなく、各選択肢の英文の意味の違いを理解できるかどうかを問う問題であるといえる。選択肢をみると、全てに比較に関する表現が含まれているのが分かる。生徒はこの選択肢の「目標となる文法事項（＝比較表現）」が含まれた英文を読み、比較表現に関する知識を活用して、各英文の意味の違いを読み取ることができれば正解することが可能である。つまり、英文を読み、文法知識を活用して適切に理解することが求められる問題のため、図1から「読むこと」に関する「知識・技能」を測る問題と判断できるのである。

次の問題例②は「参考資料中学校版」に掲載されている問題である。

以下は、AとBのSNS上でのやり取りです。対話の流れに合うように、()内の語を適切な形に変えたり、不足している語を補ったりして、会話が成り立つように英語を完成させなさい。

A: *Where are you now?*

B: *I am at ABC park with Ken.*

A: *What are you and Ken doing?*

B: (*play*) *basketball now. Come and join us!*

問題例②

この問題はどの領域の何を評価する問題だろうか。これを研修で参加者に尋ねたところ、「話すこと [やり取り]」の「知識・技能」という答えが多かった。正解である。ではどの文法知識を評価する問題であろうか。

この問題は、「目的や場面、状況」が与えられた中で、話す又は書く際に学んだ文法知識を使えるかどうかを問う問題、つまり手続き的知識を評価する PK-Test (Procedural Knowledge Test) である(根岸・村越, 2014)。文法事項としては、現在進行形と代名詞を適切に使えるかどうかを問う問題だと考えられる。

このように問題例②は「話すこと」、「書くこと」の「知識・技能」を測る問題だが、発表の領域においては、この問題のように学んだ文法知識を適切に活用できるかという問題が出題されることに留意したい。

4 「思考・判断・表現」を評価するには

ペーパーテストではどのように「思考・判断・表現」を評価すればよいか。資料1にあるように、「聞くこと」、「読むこと」、「書くこと」はペーパーテストで評価できる。なお、話すこと [やり取り]・[発表]については、生徒が実際に話す際の評価が適している。

次の問題例③は、「参考資料」の中の「書くこと」に関する問題である。

下記は海外交流校の生徒が送ってきた質問です。質問を読み、どちらがより効果的だと思うか英語で書きなさい。ただし、下の条件ア～ウを満たすように書くこと。

Question: Our class has been doing research about the influence of online learning on young people in the world. Which do you think is more effective for high school students to learn, traditional face-to-face classes in the classroom or online classes?

<条件>

ア 立場を明確にして、効果的だと思う理由を二つ以上挙げること。

イ 自らの経験または二つの授業形態の比較を根拠として考えを述べること。

ウ 論理の構成や展開を工夫して、複数の段落から成る文章で書いて伝えること。

問題例③

この問題例③では、示された三つの条件を満たし、目的・場面・状況に応じた表現内容になっているか、その適切さを測ることができるので「思考・判断・表現」の評価問題となる。条件を全て満たして書いていれば評価「b」であり、評価「a」は「三つの条件を全て満たした上で、自分の授業経験や両者の比較を効果的に示しながら書いている」状況である。つまり、ア、イ、ウの条件について詳しく表現できていれば「a」となる。なお、この際に三つの条件以外のことを書いていけば、「a」ではないことに注意する。

この問題が含まれる「参考資料高校版」の事例4では、「指導と評価の一体化」の観点から、それぞれの条件を単元内で丁寧に1時間ずつ指導し、生徒全員が目標を達成できるよう配慮して評価する状況が示されている。また、この設問に対する生徒の解答例だけでなく、「思考・判断・表現」に加えて、「知識・技能」と「主体的に学習に取り組む態度」の評価の在り方も示されており、参考になる。

「聞くこと」と「読むこと」については、「参考資料高校版」の事例2を基に確認したい。事例2の「設問の作成」(p. 63)では、「必要な情報」、「概要」、「要点」、「詳細」のそれぞれの設問例が示されている。資料2はその中の「概要」に関する設問例の抜粋である。

概要	選択	<ul style="list-style-type: none"> ・ 話題を選ぶ。 ・ 内容に合う絵や図, グラフ, 英文を選ぶ。 ・ 内容に合うように, 絵や図を並べ替える。 ・ 概要をまとめた文章を選ぶ。 ・ 内容に合うように, 英文を時系列に並べ替える。
	記述	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容に合うように, 表やグラフの空欄に単語等を入れる。 ・ 内容に合うように, タイトルをつける。 ・ 概要を書く。

資料2 設問の作成例(「参考資料高校版」)

この設問例に示された問題は、大学入学共通テストのリーディング及びリスニングで見つけることができる。例えば令和3年度共通テスト(1月16日)のリスニングの大問3の間12では、「依頼」又は「誘い」を軸とした二人の会話を聞き、登場人物の一人である先生の後日の行動として最も適切なものを選ぶ問題が出題された。放送された英文では、「*Please come!*」と生徒が4月14日に行われるミュージカルに先生を誘うのに対して、先生が「*Oh... no, wait! There's a teachers' meeting on that day!*」と答えている。問いは、4月14日に先生が何をしているか、選択肢から選ぶ問題である(答えは *attend a meeting* 「会議に出席している」)。

この出題を分析すると概要を問うリスニング問題の作成方法についてヒントが得られる。またリーディングの問題についても、同じように分析して活用することが可能である。

また、CEFR-Jのサイト(<https://www.cefr-j.org>)にも、CAN-DOテストのサンプル版が掲載されている。例えば「聞くこと」に関して、A2.2の問題のCAN-DO項目は「学校の宿題、旅行の日程などの明確で具体的な事実を、

はっきりとなじみのある発音で指示されれば、要点を理解することができる。」であり、「思考・判断・表現」の問題と判断できる。このサンプルテストには、具体例及び十分満足できるレベルの生徒の解答例も示されており、実際にテストを行う際に活用できる。ぜひ問題作成の際には参考としたい資料である。

5 まとめ

以上、本稿ではペーパーテストによる「知識・技能」と「思考・判断・表現」の評価について俯瞰して述べてきた。新学習指導要領の実施に伴い、三つの観点による評価が本格化される。ペーパーテストに加えて、パフォーマンス評価についても、実施可能性と妥当性を考慮した評価方法を考えつつ、実践して内容のまとまりごとの観点別学習状況の評価の在り方を探る必要がある。

高等学校の評価の在り方については、今後各学校の実践例を集めつつ、望ましい指導と評価に関して、更に研究を深めていくことができればと思う。

<引用資料・参考資料>

- 国立教育政策研究所(2021)『「指導と評価の一体化」のための学習評価の参考資料 高等学校 外国語』
- 国立教育政策研究所(2020)『「指導と評価の一体化」のための学習評価の参考資料 中学校 外国語』
- 大学入試センター(2021)「外国語〔英語(リスニング)〕」(令和3年1月16日)
- 東京外国語大学投野研究室(2021)『CEFR-J CAN-DO テスト:サンプル版』(Version 1.0) <https://www.cefrj.org/download.html> #cefrj_testtasks (閲覧日 2021/9/8)
- 根岸雅史, 村越亮治(2014)「文法の手続き的知識をどう測るか」Arcle Review, No. 8, pp. 22-33